

「定家」詞章 (喜多流)

ワキ 山より出づる北時雨山より出づる北時雨

行くへや定め無るらん これは北國方より  
出でたる僧にて候 我未だ都を見ず候程に  
只今都へ上り候 冬立つや旅の衣の朝まだ  
き 旅の衣の朝まだき 雲も行きかふ遠近  
の山又山を越え過ぎて 紅葉に残る眺まで  
花の都に着きにけり花の都に着きにけり  
慚う急ぎ候程に これははや上京とかや申  
し候 心静に一見せばやと思ひ候 面白や  
頃は神無月十日餘り 木々の梢も冬枯れて  
枝に残りの紅葉の色 處々の有様までも  
都の景色は一人の 眺殊なる夕べかなや  
時雨が振り来りて候 これなる宿りに立寄  
り時雨を晴さばやと思ひ候

シテ なうなう其の宿りには何とて立寄せ給ふぞ

ワキ さん候只今の時雨に立寄りて候 さて此處をば如何なる處と申し候ぞ

シテ これは時雨の亭とて由有る處なり 其の心をも知し召して立寄せ給ふかと 思へばかやうに申し候

ワキ げにげにこれなる額を見れば 時雨の亭と書かれたり折から面白う候 さてこれは如何なる人の建て置かせ給へる所にて候ぞ

シテ これは藤原の定家の卿の建て置かせ給へる所なり 都の内とは申しながら心凄く 時雨物哀なればとて此の亭を建て置き 年々歌をも詠じさせ給ひしとなり 古跡といひ折からといひ 逆縁の法をも説き給ひて彼の御菩提をもお弔ひあれと 勧め参らせん其の為に 委しく教へ申すなり

ワキ さては藤原の定家の卿の建て置かせ給へる所かや さてさて時雨をとどむる宿の 歌は何れの言の葉やらん

ワキ 北の山から降る時雨はどこ

に落ち着くという当てもない。私は北国より来た僧ですが思い立って冬の早朝に旅立ち、紅葉の残る都にやうて来ました。急ぐうちに上京辺りに着きましたが、今は十月十日余り、木々の梢は冬枯れているがまだ枝に残る都の紅葉が美しい。おや、時雨が降ってきた。この宿で晴れるのを待とうもし、その宿に何ゆえ立ち寄るのですか。

ワキ 時雨が晴れるのを待っています。ここは何という所ですか。

シテ ここは時雨の亭という由緒ある所。それを知って立ち寄ったのですか。

ワキ 確かに額に「時雨の亭」と書かれています。どういう方が建てたのですか。

シテ 藤原の定家卿が建てたものです。都の内でも淋しい所ですが、時雨の降る頃この亭で歌を詠まれたとか。旧跡でもあるし時雨も降ってきたので定家卿の菩提を弔ってください。謂れを詳しく話しましょう。

ワキ 定家卿が建てたものですか。時雨の歌を詠まれたとはどんな言葉なのでしょう

シテ いや何れとも定め無き 時雨の頃の年々なれば 分きてそれとは申し難しさりながら 時雨時を知るといふ心を 偽の無き世なりけり神無月 誰が誠より時雨れ初めけん 其の詞書に私の家にてと書かれたれば 若し此の歌をや申すべき

ワキ げに哀なる言の葉かな さしも時雨は偽の無き世に残る跡ながら

シテ 人はあだなる古事を 語れば今も假の世にワキ 他生の縁は朽ちもせぬ これぞ一樹の蔭の宿り

シテ 一河の流汲みてだに

ワキ 心を知れと

シテ 折からに

地謡 今降るも宿は昔の時雨にて 宿は昔の時雨にて 心澄みにし其の人の 哀を知るも夢の世の げに定めなや定家の 軒端の夕時雨 古きに歸る涙かな 庭も籬もそれとなく 荒れのみ増る叢の 露の宿りも枯れ枯れに物凄き夕べなりけり物凄き夕べなりけり

シテ お僧に申すべき事の候 今日志す日に當りて候程に墓所へ参り候 そと御参り候へワキ それこそ出家の望む所にて候へ さらに御供申し候べし

シテ こなたへ御入り候へ なうなうこれなる石塔御覧候へ

ワキ げにげにこれなる標を見れば 星霜古りたるに葛葛匍ひ纏ひて形も見え分かず候 これは如何なる人の標にて候ぞ

シテ これは式子内親王の御墓にて候 葛葛をば定家葛と申し候

ワキ あら面白や定家葛とは如何なる謂はれにて候ぞ

シテ 式子内親王初は賀茂の齋院に供はり給ひ程無く下り居させ給ひしに 定家の卿忍び

シテ どれとは定められませんが「時雨の時を知る心」として「偽りの無き世なりけり神無月誰がまことより時雨初めけん」と詞書に家にて歌つたと書かれているこの歌ではないでしょうか。

ワキ なるほど趣の深い歌です。時雨は定家卿の亡き後も変わりなく降っています。

シテ 人の命は儂く昔の事を話すと今もこの世に…。

ワキ 同じ木陰に雨宿りしたあなたとの縁も宿縁。

シテ 同じ河の水を汲むのもワキ 深い意味があると知れと。

シテ 折からに

地謡 今降る時雨も昔この宿に降った時雨と同じ。心澄ませて住んだ人を思うとこの世が無常と知れ、涙がこぼれます。庭も籬も分からぬ程荒れたもの凄い夕景色です。今日は命日なので、お僧も墓所にお参りください。

ワキ 望むところ、お供します。

シテ この石塔をご覧ください。

ワキ なんとこの石塔は随分年月が経ち、葛葛が形も見えないほどに這い纏っている。

シテ これは誰の墓ですか。これは式子内親王の墓、葛葛は定家葛と言います。

ワキ 定家葛の謂れとは。

シテ 式子内親王は賀茂の齋院となられましたが、役を退く

忍びの御契浅からず 其後式子内親王程無  
く空しくなり給ひしに 定家の執心葛とな  
つて 此の御墓に匍い纏ひて 互の苦離れ  
やらず 共に邪姪の妄執を 御経を讀み弔  
ひ給はゞ 尚々語り参らせさむらはん

地謡

忘れぬものを古の 心の奥の信天山 忍び  
て通ふ道芝の露の 世語由ぞ無き

地謡

と定家卿が人に隠れて通い  
深い契りを結ばれ、式子内  
親王が亡くなると定家卿の  
執心が葛となつて墓に這い  
纏い、二人は苦患を逃れる  
事ができないのです。

シテ

今は玉の緒よ絶えなば絶えね存へば

シテ

人に忍んで通い合つた事が  
情けなくも世の噂に。

地謡

忍ぶる事の弱るなる 心の秋の花薄 穂に  
出で初めし契とて又枯れ枯れの仲となりて

シテ

いつその命がなくなるの  
ならば亡くなつてしまえ

シテ

昔は物を思はざりし

地謡

このままでは恋を隠す力が  
弱まり人に知られてしまう  
かもしれないから。契りを  
結ぶも離れ離れに

地謡

後の心ぞ 果てしも無き

(クセ)

哀知れ霜より霜に朽ち果てて 世々に古り  
にし山藍の袖の涙の身の昔 憂き戀せじと

シテ

物思いの絶えない身に。

御祓せし 賀茂の齋の院にしも 供はり給

地謡

逢つた後の心残りは果てな  
い。年とともに老いてしま

ふ身なれども 神や受けずもなりにけん  
人の契の色に出でけるぞ悲しき 包むとす  
れどあだし世のあだなる仲の名は洩れて  
よその聞こえは大方の空恐ろしき日の光  
雲の通ひ路絶え果てて 少女の姿留め得ぬ  
心ぞつらき諸供に

つた察してくれ、という歌  
のように、恋などしないと  
賀茂の齋院になつたが神が  
聞き入れなかつたのか契り  
を結び、世に知られて二人  
の逢瀬は絶えたのです。

シテ

げにや歎くとも戀ふとも逢はん道や無き

シテ

嘆いても恋しくても逢うす  
べもない

地謡

君葛城の峯の雲と 詠じけん心まで 思へ  
ばかかる執心の定家葛と身はなりて 此の

地謡

と詠じたこの執心が定家葛

御跡にいつとなく 離れもやらで蔦紅葉の  
色焦がれ纏はれ おどろの髪も結ぼほれ  
露霜に消えかへる妄執を助け給へや  
古りにし事を聞くからに 今日も程無く呉  
織怪しや御身誰やらん

と化して墓に絡みつき、や  
つれ果て露霜の様に消えて  
しまった。この執心の罪を  
お救いください。

シテ

誰とても亡き身の跡は浅茅生の 霜に朽ち  
にし名ばかりは残りても猶由ぞ無き

シテ

昔の話聞くうちに夕暮れ  
に。あなたは誰なのですか  
この身は霜に朽ち果て名ば  
かり残つてもし方ない。

地謡

よしや草葉の忍ぶとも 色には出でよ其の  
名をも

地謡

草葉に隠れた身の上でも名  
前だけでも教えて下さい。

シテ 今は包まじ

地謡 此上は 我こそ式子内親王 これまで見え  
来れども 眞の姿は陽炎の石に残す形だに  
それとも見えぬ蔦葛苦を助け給へと云ふか  
と見えて失せにけり云ふかと見えて失せに  
けり

(中人)

ワキ 夕べも過ぐる月影の 夕べも過ぐる月影  
の 松風更けて物凄き草の蔭なる露の身  
を 念の珠の數々に弔ふ法ぞ誠なる弔ふ  
法ぞ誠なる

シテ 夢かよ闇の 現の宇津の山 月にも辿る  
蔦の下道 昔は松風蘿月に言葉を交し 翠  
帳紅閨に枕を雙べ

ワキ 様々なりし情の末

シテ 花も紅葉も散り散りに

ワキ 朝の雲

シテ 夕べの雨と

地謡 古事も今の身も夢も現も 幻も 共に無常  
の世となりて跡も残らず なになかなかの  
草の蔭 さらに葎の宿ならで 外はつれな  
き定家葛これ見給へや御僧

ワキ あら痛はしの御有様やなら痛はしや

シテ 佛平等説如一味雨 随衆生性 所受不同  
御覽ぜよ身はあだ浪の立居だに 亡き跡ま  
ても苦の 定家葛に身を鎖ぢはれてかかる  
苦隙無き所に 有難や 只今讀誦し給ふは  
薬草喻品よなう

ワキ なかなかなれや此の妙典に 漏るる草木の  
有らざれば 執心の葛をかけ離れて 佛道  
成らせ給ふべし

シテ あら有難やげにもげにも これぞ妙なる法  
の心

ワキ 普き露の恵を受けて

シテ 今は隠しますまい

地謡 私こそ式子内親王です。ま  
ことの姿は消えて、石塔は  
蔦葛に這い纏われて形も見  
えない。どうぞこの苦患を  
救ってください。と言って  
消えてしまいました。

(中人)

ワキ 夕暮も過ぎて月影がさし、  
松風が吹き渡る草葉の蔭に  
消えた人を思い回向する。

シテ 宇津山の蔦の細道は月夜も  
暗いと歌われ、昔は松風、  
蔦葛を照らす月に風流な言  
葉を取り交わし、美しい閨  
に枕を並べて

ワキ 睦まじい契りを結んだが

シテ 花も紅葉も散り失せて

ワキ 朝の雲

シテ 夕の雨のように

地謡 昔も今も、夢も現も幻も跡  
かたもなく、定家葛にとり  
纏われる有様。お僧よこの  
有様をご覧ください。

ワキ 気の毒なことだ。(経を唱  
える) 仏が平等に法を説く  
のは雨が一樣に降るが如き  
だが衆生の性の相違で受け  
入れるのは同じではない：

シテ 定家葛に閉じ込められ苦し

ワキ 法華経の功德は草木も洩れ  
ることはない。成仏なさい

シテ いかにも有難い法華経の心

ワキ 一切がこの功德に浴して

シテ 二つも無く  
ワキ 三つも無き

地謡 一味の御法の雨の滴皆霑ひて 草木國土  
悉皆成佛の機を得ぬれば定家葛もかかる涙  
もほろほろと解け廣ければ よろよると足  
弱車の火宅を 出でたる有難さよ 此の報  
恩にいざさらば ありし雲居の花の袖 昔  
を今に返すなる其の舞姫の小忌衣

シテ 面なの舞の  
地謡 有様やな

(序ノ舞)

シテ 面なの舞の有様やな

地謡 面なや面はゆの有様やな

シテ もとより此の身は

地謡 月の顔ばせも

シテ 曇りがちに

地謡 桂の黛も

シテ 落ちぶるる涙の

地謡 露と消えてもつたなや蔦の葉の 葛城の神  
姿恥ずかしや由なや 夜の契の夢の中にと  
ありつる處に歸るは葛の葉の 本の如く匍  
ひ纏はるるや定家葛 匍ひ纏はるるや定家  
葛の 儂くも形は埋もれて失せにけり

シテ 唯一あつて二つとも  
ワキ 三つともない。

地謡 一樣に降る雨の様な有難い  
経の功德に浴して、草木國  
土も成仏する機縁を得て、  
定家葛も涙も解け広がり、  
よろよると苦患の三界から  
出る事ができたのは有難い  
事です。ご恩報じに舞をお  
目にかけましょう。

シテ でも恥ずかしい

地謡 舞様でございます。

(序ノ舞)

シテ 恥ずかしい舞様です。

地謡 晴れがましい有様でした

シテ もとものこの身は。

地謡 月の様に美しい顔でしたが

シテ 顔は曇りがちに

地謡 三日月のようだった眉も

シテ 涙に溺れて零落して

地謡 露のように消えてしまい、  
あの葛城の神のような醜い  
姿となつてしまいました。  
情けなく恥ずかしくて夜の  
間夢の中だけでお目にかか  
れるのです。と言って元の  
墓に帰ると、定家葛はまた  
墓に這い纏わりついて内親  
王の姿はその中に埋もれて  
消えてしまいました。